

高等学校の教科等における道徳指導の留意点

— 「現代社会」、「ホームルーム活動」、「総合的な学習の時間」における実践を通して —

奥 山 澄 夫¹

高等学校の道徳教育は人間としての在り方生き方に関する教育である。指導に当たっては、生徒自らが人間としての在り方生き方及び自己の生き方を深く考えるように促すことが必要である。そのための指導を、「現代社会」、「ホームルーム活動」及び「総合的な学習の時間」における道徳指導の実践に見られた生徒の変容やそれを生み出した指導上の工夫を基に、高等学校の教科等で行う道徳指導の留意点としてまとめた。

はじめに

高等学校の道徳教育は、「豊かな心をもち、人間としての在り方生き方の自覚を促し、道徳性を育成することをねらいとする教育活動」（文部科学省 2009a p. 18）である。道徳性とは人格の基盤をなし、社会の中で人間としての本来的な在り方やより良い生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にするものであり、その育成は学校教育にとって重要な課題である。道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うが、「今日の家庭や地域社会及び学校における道徳教育の現状や生徒の実態などからみて、更に充実を図ることが強く要請されている。」（文部科学省 2009a p. 18）とある。高等学校においては、高等学校学習指導要領の改訂に伴い、平成 22 年度から道徳教育の全体計画を作成することとなり、一層具体的に道徳教育を展開するように努める必要がある。

神奈川県では、各高等学校における道徳教育について、「校長の方針の下に、全教職員の参加と協力を得ながら道徳教育の全体計画を作成して指導の方針や重点を明確にし、地域や家庭と連携しながら、道徳教育のより一層の充実に取り組む」（神奈川県教育委員会 2010）こととしている。また、平成 23 年度より全ての県立高等学校でシチズンシップ教育が本格実施されるが、政治参加教育や司法参加教育、消費者教育と並んで、道徳教育は本県におけるシチズンシップ教育の 4 本柱の一つとなっている。

研究の目的

本研究は、高等学校における教科等で行う道徳教育の充実を目指すことを目的とし、3 名の調査研究協力員による道徳の指導を行った授業の成果と課題を基に、教科等で行う道徳指導の留意点をまとめたものである。なお、本稿では教科等で道徳の指導を行う授業を「道徳を意識した授業」と呼ぶ。

研究の内容

1 道徳教育の必要性

現代の社会では、知識基盤社会の到来とグローバル化の進展とともに、産業構造の転換や科学技術の開発などが急速に進んでいる。このような社会の急激な変化は、環境や生命倫理、情報などの様々な分野でこれまでの社会が経験したことのない課題を生んでいる。また、現代の社会について、「知・徳・体の調和ある発達に不可欠な『徳』が、社会の中で見失われ、あるいは、埋没しているという危機的な状態にある」（文部科学省 2009b）ことが指摘されており、社会全体のモラルの低下、家庭や地域の教育力の低下、社会体験や自然体験の不足などの問題が挙げられている。

このような社会の変化は子どもたちへの影響も大きいと考えられる。現在の子どもたちに見られる傾向として、「他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、生命尊重・人権尊重の心、正義感や遵法精神の低下や、基本的な生活習慣の乱れ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など」（文部科学省 2009b）が指摘されている。

佐倉市は、平成 17、18 年度に小学生から成人までを対象に道徳意識調査を行った。その中で、高校生については、ほかの世代に比べ道徳的習慣が身に付いていないことが報告された（佐倉市教育センター 2007）。この結果について、橋本（2009 p. 238）は「必ずしも時間と指導を経て単純に道徳性が上昇していかない現実がある。」ということを指摘している。

このような社会状況や高校生の実態から、これからの社会の中で生徒が主体的かつ適切な判断や行動をするためには、その基準となる価値観を構築することが重要であり、道徳教育の必要性が高まっている。

2 高等学校の道徳教育

(1) 人間としての在り方生き方に関する教育

高等学校の道徳教育の考え方として示されているのは、人間としての在り方生き方に関する教育である。新高等学校学習指導要領の総則には、高等学校の道徳

1 カリキュラム支援課 指導主事

教育について、「生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達の段階にあることを考慮し人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図る」ものと明記されている。

人間としての在り方生き方に関する教育とは、人間としての在り方を問うことで自分自身に固有な選択基準ないし判断基準、「つまり人生観・世界観ないし価値観を形成することを目指す教育」(金井 2000)である。

指導に当たっては、教員が道徳的価値を一方的に教えるのではなく、与えられた価値が望ましいものであるかどうかを自分で考えさせることが中核になければならない。そのため、「教師の一方的な押し付けや単なる先哲の思想の紹介にとどまることのないように留意し、人間としての在り方生き方について生徒が自ら考え、自覚を深めて自己実現に資するように指導の計画や方法を工夫すること」(文部科学省 2009a p. 19)が求められる。

(2) 補充、深化、統合の場面の必要性

小・中学校には道徳教育の要として「道徳の時間」が設けられ、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育を補充、深化、統合する役割を担っている。

例えば、教科で道徳を意識した授業を行う場合、教科目標を達成する必要があることから、道徳教育としての指導は断片的であったり徹底を欠いたりしてしまうことが考えられる。補充とは、そのような断片的で徹底を欠いた指導の不十分さを補充するという意味である。深化とは、このような不十分さの中では考えが浅いままで終わってしまうことは避けられないことから、道徳の時間で考えを深めるという意味である。統合とは、各教科で行われる道徳教育は断片的になりがちであることから、道徳の時間でそれらを統合するという意味である。

高等学校には「道徳の時間」に当たるものが教育課程に設けられていないことから、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を一層充実させるために、補充、深化、統合の場面設定について工夫が必要となる。

(3) 中核的な指導の場面

高等学校では、公民科の「現代社会」及び「倫理」、特別活動が「人間としての在り方生き方」を目標として掲げていることから、これらの科目等は道徳の中核的な指導の場面として重視されている。また、総合的な学習の時間の目標には「自己の在り方生き方を考えることができるようにする。」とあり、人間としての在り方生き方に関する教育を行う場面として積極的に活用することが考えられる。

新『高等学校学習指導要領解説 総則編』には、そのほかの教科についてもその目標と道徳教育との関連が示された。「現代社会」、「倫理」、特別活動だけでなく、様々な教科・科目等においても道徳教育を展開し

ていくことが求められる。

3 高等学校における道徳教育の質的充実と量的充実

様々な教科・科目等で道徳の指導を行うためには、まず、「教師が自己の授業内容を見直し、『私が教えている教科の内容で、どこに道徳問題や人格の教えがあるだろうか』と問うこと」(リコーナ 2001)が求められる。その上で、より効果的な道徳の指導を工夫しながら指導の質を高めることが大切である。そして、個々の教員が道徳を意識した授業を行うことで、道徳の指導場面が増えていく。本研究では、高等学校における道徳教育の質と量の向上を次のように捉えた。

質：人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせる指導の内容や方法の充実

量：人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせる機会の充実

質的な充実に向けては、まず、各教科、総合的な学習の時間、特別活動がどのように道徳教育と関連するかを明確にすることが必要である。その上で、それぞれの特質に応じた道徳の指導を考え、実践する。指導に当たっては、教員が一方的に教え込んだり、指示だけで終わらせたりするのではなく、主体的に考えさせたり、自分のこととして考えさせたりするような工夫をすることで、生徒自らが考えを深めるようにすることが大切である。

量的な充実に向けては、各教科や総合的な学習の時間、特別活動において道徳の指導を行う場面を増やすことが大切である。ただし、道徳の指導を行う機会をただ増やすだけでは、それぞれの指導が断片的になってしまう可能性が高い。そこで、各教育活動を道徳教育の視点から意義付けした上で、共通の道徳的価値をもつ教育活動を関連付けたり、補充、深化、統合の機能をもたせた時間を設けたりすることで、人間としての在り方生き方について考える機会を拡充することが大切である。

4 道徳を意識した実践事例

本研究では、三つの高等学校で、それぞれ公民科の「現代社会」、特別活動のホームルーム活動及び総合的な学習の時間において道徳を意識した授業を行った。

なお、これらの事例は人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせる指導の質的な充実を図ると同時に、教科・科目等で道徳の指導を行うことで量的な充実を図ったものである。

(1) 実践事例1 「現代社会」第3学年

A 授業の概要

A高等学校における「現代社会」の授業で、福祉と出生前診断という二つのテーマを組み合わせ、7時間の単元計画を作成し、生命の尊重、思いやり、差別や偏見のない社会の実現などの道徳的価値に照らして、

生徒に人間としての在り方生き方及び自己の生き方を考えさせた事例である。

単元の第1時から第6時は福祉社会の実現に向けて必要とされる事項について学習し、様々な立場や状況にある人とその家族が安心して暮らしていける社会の在り方を考えた。その中で、第6時は先天性障害について学習するとともに、第7時の学習と関連させるために、「出生前に胎児に先天性障害があることが分かることについてどう思うか」というテーマでレポートを書かせた。第7時は出生前診断について学習し、生命の尊重という道徳的価値に照らして自己の生き方を考えさせた。

イ 道徳教育の充実を図る工夫

本事例では、道徳教育の充実を図るために次のような工夫をした。

- ・教科の学習内容の中から、学校の特色ある教育活動を踏まえて、人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせる単元を選ぶ。
- ・興味・関心を喚起し主体的に考えさせるために、プレゼンテーションソフトを活用し、画像を見せたり、クイズ形式の発問を交えたりする。
- ・生徒の考えを深めるために、「現代社会」の学習を通して新たな知識を与え、それに基づいて道徳的価値に気付かせたり考えさせたりする。
- ・生徒の考えを深めるために、別の視点から考えさせたり、第7時は前の時間に書いた友達のレポートを読ませたりして、様々な考えがあることに気付かせ、同じテーマで再度レポートを書かせる。

ウ 成果と課題

(ア) 成果

出生前診断とその生命倫理上の課題、関連する法律について理解させたり、友達の考えが書かれたレポートを読ませたりすることで、生徒のレポートの内容に変化が見られ、考えが深まったり揺れ動いたりした様子が見られた。また、レポートの内容から生徒は与えられたテーマについて真剣に考えたことが分かり、主体的に考えることができたといえる。

次に示すのは、同一生徒が書いた二つのレポートの内容の一部である。1回目は差別について触れ、2回目は考えが深まり、社会の在り方についても言及するようになっていることが分かる。

1回目のレポート

私は出生前に胎児に障害があると分かることは、差別につながるのではないかと思います。

2回目のレポート

クラスの皆の意見を読んで、同じような意見をもつ人が多いことを知りました。大切なのは、子どもとその親が安心して暮らせる体制を整えることと、社会に生きる一人ひとりの意識だと思いました。

(イ) 課題

課題は、教科学習及び道徳教育のそれぞれの目標に迫るために、どのように指導内容のバランスを取りながら授業を展開するかということである。「現代社会」は高等学校における道徳教育の中核的な指導の場面として位置付けられているが、「あくまで教科の科目である以上、先人の思想や人間社会の諸事象の学問的理解を基盤として授業が展開されるのであって、小・中学校の『道徳の時間』の趣旨と一致するものではない。」

(橋本 2009 pp.239-240) のである。つまり、「現代社会」は、教科としての学習や目標があるために、道徳の指導が断片的になったり、徹底を欠いたりすることは避けられないと考えられる。一方で、「現代社会」は道徳教育の中核的な指導の場面として、人間としての在り方生き方について生徒自らに考えさせることが不可欠であり、考える時間を生徒に保証しなくてはならない。道徳教育の中核的な指導の場面として、このような課題を解消するために、次のような対応が必要となる。

- ・年間指導計画の中で道徳を意識した授業を行う単元を明確にし、生徒に考えさせる時間を確保する。
- ・不十分にならざるを得ない部分は総合的な学習の時間やホームルーム活動で補充、深化、統合できるように一層具体的に道徳の指導を展開できる体制を構築する。

(2) 実践事例2 「ホームルーム活動」第3学年

ア 授業の概要

B高等学校におけるホームルーム活動で、杉原千畝(ちうね)を扱った演劇を見る芸術鑑賞会の事前学習と事後指導を行い、勇気、生命の尊重、強い意志などの道徳的価値に照らして、人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせた事例である。困難を必ず乗り越えていこうという点で、生徒にやや課題があることを踏まえて指導計画を作成し、実践を行ったものである。

事前学習では、ナチスからユダヤ人を救うべきかどうか悩んだ杉原千畝の葛藤とユダヤ人を救うためにビザを書き続けた彼の心情の2点に焦点を当て、授業者と生徒との対話を中心に、話し合い活動を取り入れながら、生徒に彼の生き方について考えさせた。

芸術鑑賞会の事後指導では、杉原千畝の生き方について感じたことや自己の生き方に生かしたいと思ったことなどをワークシートに書かせた。

イ 道徳教育の充実を図る工夫

本事例では、道徳教育の充実を図るために次のような工夫をした。

- ・生徒に見られる課題を把握し、その課題を解決する指導を道徳教育の視点から考える。
- ・芸術鑑賞会の事前学習及び事後指導をLHRで行うことで、人間としての在り方生き方及び自己の生き方

について考える機会を短期間のうちに複数回設ける。

- ・杉原千畝の生き方に対する興味・関心を喚起するために、感動する読み物資料を用意して授業者が読み聞かせる。
- ・意見を述べやすくするために、発問に対する答えは一つではなく様々な考えがあつてよいことを伝える。
- ・杉原千畝の生き方に道徳的価値を見だし、考えを深め、自己の生き方を考えることができるように、発問の順序やワークシートの構成を考える。
- ・考えを深めるために、自分が考えたことを発表させたり、グループ内で伝え合ったりさせる。
- ・事前学習の最後に杉原千畝に助けられたユダヤ人の手紙を紹介して余韻をもって授業を終わらせ、芸術鑑賞会につなげる。

ウ 成果と課題

(ア) 成果

ワークシートの記述内容から、生徒が読み物資料や演劇を通じて杉原千畝の生き方に感動し、感銘を受け、「勇気をもって生きたい」、「強い意志をもって生きたい」、「より良く生きたい」という気持ちを抱いたことが分かった。このような前向きに生きようとする意欲は、杉原千畝の生き方を通して、生命を尊重する態度、勇気、強い意志などを学んだことで高まったと考えられる。このことから、本実践において生徒の課題として捉えた、困難を乗り越えようとする態度の育成に資することができたといえる。

次に示すのは、事前学習及び事後指導で同一生徒がワークシートに記述したものである。この記述から、自分自身を積極的に受け入れ、自分の生き方を前向きに考えるようになっていることが分かる。

事前学習のワークシートから

杉原千畝のことは知らなくて今回の授業で初めて知りました。ユダヤ人のために自分の地位や家族のことがあったにもかかわらず、命令に背いてユダヤ人たちのビザを発行して助けた勇気と行動力は私にはないものだし、すごく尊敬しました。

私も勇気や行動力がほしいと思いました。自分のこれからの人生でこういうことができたらいいいなと思いました。

事後指導のワークシートから

私は、事前学習で杉原千畝が行った行動を知り勇気があるな、行動力がある人だなと単純にそう思っていました。けれど、芸術鑑賞会で劇を見て、ただ勇気や行動力があつたわけではないんだと思いました。杉原千畝には勇気や行動力はあつたと思います。けれど、あんなに大きな決断ができたのは、家族などの支えや杉原千畝のことを思いやる周囲の人の気持ちが強かったからだと思いました。

私は、勇気も行動力もないけれど、それを補えるくらいの優しさや仲間をつくって、自分の力を他人に使っていきたいなと思いました。

生徒の記述に「普段あまり一緒に話をしたりしない人とも授業を通じて話すことができてすごく良かったと思います。話合いをしながら、楽しくみんなで頭を悩ませて考えていけたので、とても新鮮な気がしました。」というものがあつた。話合い活動は、ほかの人と関わる大切さを実感させ、意見交換を通じて考えを深めさせるという点で、道徳教育に有効であることが分かる。

(イ) 課題

課題は3点挙げられる。一つは、道徳教育に対する教員の不安を解消することである。授業者は、実践の前まで、発問を通じて生徒に人間としての在り方生き方を考えさせたり話し合わせたりする授業展開に不安を感じていた。しかし、実際に授業を行うと、自分の担当教科の授業でも人間としての在り方生き方を考えさせる授業展開ができるという思いをもつに至った。高等学校の道徳教育を充実させるために、研究授業や実践を通じて道徳の指導方法に対する理解を深めることが重要である。

次の課題は、ねらいを明確にした上で発問の言葉を選ぶということである。授業は発問を中心にテンポよく進み、生徒は授業者が期待する道徳的価値に気付いていった。しかし、どう答えてよいか生徒が戸惑う発問が一つあり、生徒の答えが多岐に渡ってしまい、期待する答えを引き出すまでに時間が掛かった。授業者が発する言葉はよく吟味することが大切である。

最後は、教科の学習との関連を図ることである。授業後の研究協議で、「歴史的背景を生徒が理解していれば、より重みを伝えることができただろう」という指摘があつた。この実践事例はホームルーム活動と芸術鑑賞会の関連を図ったものだが、日本史や世界史との関連を図れば更に充実した内容にすることができる。

(3) 実践事例3 「総合的な学習の時間」第1学年

ア 授業の概要

C 高等学校の「総合的な学習の時間」において、学校の道徳教育の全体計画に記載された第1学年の目標に基づき、身近なマナーを題材に選び、公德心という道徳的価値に照らして人間としての在り方生き方及び自己の生き方について考えさせた事例である。

携帯電話教室や地域貢献デーなどの教育活動との関連を意識して、「携帯電話のマナー」、「電車内でのマナー」、「教室でのマナー（ゴミのポイ捨てを考える）」、「通学路でのマナー」という四つのテーマで4時間の単元を構成し、継続してマナーについて考えさせる機会を設けた。第4時の「通学路でのマナー」では、生徒が撮影した通学路の写真や地域の人へのインタビュー映像を見せながら考えを深めさせ、通学路でのマナーとして自分にできることを考えさせた。単元の最後には、生徒に考えてほしかったことを授業者の思いとして伝えた。

イ 道徳教育の充実を図る工夫

本事例では、道徳教育の充実を図るために次のような工夫をした。

- ・学校や学年等の道徳教育の指導目標を踏まえて単元の目標を設定する。
- ・関連する教育活動を意識して単元計画を作成する。
- ・生徒の関心を高めるために、教材の作成に生徒を関わらせる。
- ・地域の人が生徒たちを見守ってくれているということに気付かせる。
- ・身近なマナーに対する課題意識をもち、自分の問題として捉え、自分にできるマナー向上の取り組みを考えることができるように発問の順序を考える。
- ・授業者の思いを単元の最後に伝える。

ウ 成果と課題

(ア) 成果

授業者の所属校は、規範意識の育成を道徳教育の目標の一つとしている。今回の実践は、学校の道徳教育の目標に基づいたものになっている。

継続的にマナーを題材として扱うことで、生徒はマナーについての考えを次第に深めていくことができた。第3時の「教室でのマナー(ゴミのポイ捨てを考える)」では、生徒から教室に置くゴミ箱を増やすという案が出た。実際にゴミ箱を増やしたところ、教室内のポイ捨てが減った。また、校内のゴミの状況について話をする生徒が見られるようになり、マナーに対する意識が高まった。第4時の「通学路でのマナー」では、生徒が撮影した通学路の写真を教材として活用することで生徒の関心を高めることができた。また、自分たちが地域の人たちに見守られているということを知り、生徒は驚いていた。このことが地域との関わりを踏まえてマナーを考えることにつながり、その結果、通学路でのマナーについて、一人ひとりが自分にできることを主体的に考えることができた。単元の最後には、生徒から「マナー違反は人に迷惑を掛ける」、「人間関係を壊す」などの発言とともに、「自分を駄目にする」という発言を聞くことができた。マナーを守ることとは人としての誇りを守ることでもあるということに生徒が気付いたためと考えられる。

(イ) 課題

課題は2点挙げられる。一つは、ほかの教育活動との関連をより明確にすることである。本実践は、主に時期と活動内容という点からほかの教育活動との関連を意識したものである。道徳教育を一層充実させるためには、各教育活動の道徳的意義を明確にした上で関連付けができるようにすることが大切である。また、ほかの教育活動を通じて感じたことや考えたことを生徒に振り返らせる時間を設けることが大切である。本事例は、その時間として総合的な学習の時間を活用すれば、道徳の指導を補充、深化、統合する場として位

置付けることができることを示唆している。

もう一つは、話し合い活動に向けた指導を充実させることである。本実践では、生徒の状況から隣同士で相談するという程度にとどめたが、生徒が授業者の発問に対して積極的に意見を述べたり主体的に考えたりしたことから、授業者は話し合い活動に向けての手応えを感じていた。生徒の状況に応じて話し合い活動に向けた指導を積み重ねていくことが大切である。

研究のまとめ

実践事例を通じて得られた成果と課題を基に、教科等で道徳の指導を行う際の留意点を、生徒の姿、指導方法、学校全体での検討事項の三つの視点でまとめた。

生徒の姿については、次の2点にまとめた。

○生徒は人間としての在り方生き方や自己の生き方について関心がある

三つの事例では、生徒が主体的かつ真剣に考える姿が見られた。これは、授業者が生徒に興味・関心をもたせる工夫をしたこともあるが、主体的かつ真剣に考えることができたのは、普段表面に出さないが、根底には、生徒自身に人間としての在り方生き方及び自己の生き方に対する関心があるためだと考えられる。

○道徳教育により、生徒は生きることに対する関心と前向きな態度をもつ

三つの実践事例を通じて、生徒が自己の生き方について考えが揺らぎながらも、深く考えたり、このように生きたいという思いをもったりする姿が見られた。これは、道徳教育が人間としての在り方生き方を考えるという刺激を与えることで、生徒に人間として「こうありたい」、「こう生きていきたい」という気持ちを抱かせるためだと考えられる。

指導方法については、次の4点にまとめた。

○生徒の状況や身近な現実の課題を踏まえて単元の指導計画を作成する

三つの実践事例の授業者は、単元の指導計画を作成する際に、生徒の状況に基づいて道徳の指導のねらいを設定し、日常生活に見られる課題や現代の社会における課題を題材として選択した。その上で、題材に関する研究を深め、教材や指導の工夫を行い、生徒に考えさせる時間を確保した指導計画を作成した。道徳の指導に当たっては、このような準備段階が大切である。また、生徒の状況を踏まえ身近な課題を扱うことはオリジナリティのある指導に、現実の課題を扱うことはリアリティのある指導につながる。

○現実の課題を様々な道徳的価値に照らして生徒に考えさせる

三つの実践事例で扱われたテーマを通じて、生徒は様々な道徳的価値に気づき、自分の考えを深めていった。高校生という段階は、人間としての在り方生き方

という視点から現実の課題を考えさせることで、様々な道徳的価値に照らして、自己の生き方について考えさせることができる。

○主体的に考えさせる

人間としての在り方生き方について生徒自らが考えるようにするためには、生徒に興味・関心をもたせることが必要になる。実践事例では、視聴覚教材を活用する、生徒を感動させる、身近な題材をテーマにする、生徒が教材作成に関わるなどの工夫が見られた。

○考えを深めさせる

生徒が自分の考えを深めるためには、考える時間を確保すること、道徳的価値に気付かせること、考えを深めるきっかけを与えることが大切である。実践事例には、数時間の単元を構成し、その中で繰り返し考えさせるものがあつた。また、1時間の授業の中で次第に考えを深めていけるように発問やワークシートを工夫する、友達の考えを知る機会を設ける、別の視点から考えさせるなどの工夫が見られた。このような工夫は、思考、判断、表現の場を与えることでもあり、言語活動の充実につながるものである。

学校全体での検討事項は、次の2点にまとめた。

○補充、深化、統合の場面となる時間を検討する

公民科は高等学校における道徳教育の中核的な指導の場面であるが、教科としての指導目標や内容があるために、道徳の指導については徹底を欠くことも考えられる。そこで、ホームルーム活動を、補充、深化、統合の場として重視することが考えられる。また、総合的な学習の時間を積極的に道徳教育の補充、深化、統合の場として活用することも検討に値する。

○学校の様々な教育活動を道徳教育の視点から見直し、その道徳的意義を明確にし、関連を図る

今回の実践事例では、ほかの教育活動との関連を意識した取組みが見られた。より大きな成果を上げるためには、各教育活動の道徳的意義を明確にした上で関連を図ることが望ましい。そのためには、学校全体で教育活動を見直す作業を行い、それらの道徳的意義を共有することが重要である。そうすることで、個々の教員が道徳指導のための共通基盤をもち、道徳教育を組織として推進する体制を構築できる。

おわりに

高等学校における道徳教育を質的にも量的にも充実させるためには、生徒が人間としての在り方生き方及び自己の生き方に対して興味・関心をもっているということを認識することが大切である。その興味・関心を積極的に喚起し、様々な工夫を通して生徒に生き方を考えさせる指導が、現在求められているのである。

高等学校における道徳教育は、生徒に人間としての在り方生き方を考えさせ、それに照らして自己の生き

方を考えさせるものである。道徳的なテーマについて生徒が主体的に考えを深めていくためには、単に知識面の理解を図るだけでなく、道徳的価値に基づいて深く考えさせる工夫が必要であり、それが言語活動の充実にもつながる。また、教育課程上の工夫として、道徳教育の要となる時間を設けることも今後の検討課題として考えられる。

道徳を意識した授業を実践した授業者からは、実践終了後に、「生徒の反応を見たり教材を開発したりすることで充実した実践ができた」という感想があつた。本研究が、道徳教育に取り組んでみようという気持ちを高めることにつながると幸いである。

本研究を進めるに当たって、様々な助言、指導をいただいた昭和女子大学大学院押谷由夫教授、並びに道徳を意識した授業を実践していただいた3名の調査研究協力員、聞き取り調査や研究授業などご協力をいただいた方々に感謝する次第である。

〔調査研究協力員〕

県立横浜栄高等学校	桐谷 鋼哉
県立秦野曾屋高等学校	大谷 聡一郎
県立大井高等学校	後藤 英之

〔助言者〕

昭和女子大学大学院	押谷 由夫
-----------	-------

引用文献

- 神奈川県教育委員会 2010 「平成 22 年度 学校運営の重点課題」 pp. 28-29
- 文部科学省 2009a 『高等学校学習指導要領解説 総則編』 東山書房
- 文部科学省 2009b 「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286128.htm (URL は 2010 年 12 月取得)
- 金井肇 2000 「人間としての在り方生き方」(押谷由夫、宮川八岐(編著)『道徳・特別活動重要用語 300 の基礎知識』 明治図書出版 p. 63
- 橋本光洋 2009 「高等学校の道徳教育はどのように行われているのだろうか」(沼田裕之ほか(編著)『道徳教育 21 の問い』 福村出版
- リコーナ, トーマス 2001 『人格の教育—新しい徳の教え方学び方』(水野修次郎監訳・編集) 北樹出版 p. 30

参考文献

- 佐倉市教育センター 2007 「子どもたちの道徳性を育むために～未来の市民を育てよう（道徳意識調査より）～」 http://www.city.sakura.lg.jp/kyoikucenter/H19_doutoku-leaflet.htm (URL は 2010 年 12 月取得)